

Title	英修道先生を偲んで
Sub Title	
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1995
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.68, No.7 (1995. 7) ,p.220- 222
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英修道先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19950728-0220

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「よし今夜の勘定は全部俺が持つ」と多数の会員に振舞われ、会が大いに盛上ったことも懐しい思い出である。それから二十余年経ち、私が同学会の第十代理事長に選ばれたことをご報告に伺った折、先生には大変喜んでいただき、永年の学恩に少しは報いることが出来たかと嬉しく思った記憶がある。

先生は私にとって仲人であり、また古いことだが、留学から帰って家を求めるまでの一年間を雪ヶ谷の御自宅の離れにお世話になったこともありで、公私ともに大恩を忝なくしただけに、九十二歳の天寿を全うされたとはいえ、かけがいのない指導者を失った悲しみと寂寥には誠に堪え難いものがある。しかし、ご葬儀に先立ってお別れを申し上げに伺った折、拝見した先生の大往生を思わず穏やかなご尊顔は、いかにも「吾れ送り来たりし人生に悔なし」と語っているかのごとくで、生者必滅の人生、終りは常にかくありたいと、私は心の中で深く会得するところがあった。

法学部客員教授 松本三郎

英 修道先生を偲んで

英先生急逝の報を受けたのは、ワシントンであった。ジョージ・ワシントン大学で、「日本の外交」―国際関係の中の東アジア」を集中講義するため訪れていたのである。国内であればどんな無理をしてもとんで帰り、お通夜・告別式に参列したのに、ワシントンとあってはそれもかなわず、令夫人への弔電、ご子息への電話で哀悼の意を表するしかなかったことは、今日でも心苦しく思っている。

英先生との出会いは、大学四年の夏、昭和三十三年に始まる。当時、林烈助教授の議会政治のゼミに所属していたのだが、就職活動の時期を前にして、英先生に大学院に進学し、大学に残らないかとのお勧めをいただいたのである。お宅に伺い、私の成績、家庭環境、外交史という学問の性格、将来のこと、延々二時間にわたってお話しいただいた。帰宅して母に相談すると、大賛成してくれた。父は、伝染病研究所で結核を研究対象とする医者であった。医学博士の学位をとり、これかという時に自分が研究対象としていた結核に侵され、母と

二歳になった私を残して亡くなった。以後母は書道の師範をしながら、家事は祖母にまかせ、方々に出張稽古に行ったり、自宅で書道教室を開くなどして私を育ててくれた。早く社会に出、月給を得て母を楽にしたいという気持ちもあったが、母は専門こそ違え父と同じ研究者への道が開けたことを心から喜んでくれ、大学院進学が決った。就職部には「就職希望せず」の届けを出し、九月に大学院を受験、幸い合格し修士課程、さらに博士課程へと進むことになった。阿部光蔵氏（後に武蔵工業大学教授、松本三郎氏（現防衛大学校長）という二人の兄弟子にも恵まれ、英先生のご指導の下、着々と研究を進めていった。

学会へのデビューについても、英先生はご考慮下さった。当時日本国際政治学会の下部組織に日本外交史研究会があり、そこで修士論文に書いた「辛亥革命と日本の対応」の発表の機会を与えていただいた。以後、英先生とは兄弟弟子の関係にあたる石川忠雄教授（後に塾長）のお世話により、コロンビア大学に留学、アメリカからの帰途、台湾に立ち寄り英先生のかつての教え子、台湾財界で活躍しておられた林福耀氏ご一家のお世話になったことも忘れられない。

帰国後法学部副手としてスタート。助手時代の想い出は、

英先生の還暦をお祝いする記念論文集作成のお手伝いをしたことであった。東大名譽教授で日本国際政治学会の理事長であられた神川彦松先生のご自宅に伺い、口述筆記を経験、翌日きれいに清書してお届けしたり、同じく学会大長老の田村幸策先生のお宅に原稿をとりて参上したり、その間両先生から学問に対する姿勢などをご教授いただき、得難い経験であった。

この後先生のお手伝いは、英ゼミの三年生を相手に、レジュメを作らせ報告をさせたり、先生が会長をしておられた慶應書道会の顧問として、先生の代わりに夏の合宿に参加、午前四時に起きて朝露で墨をすり書を書く暁天の書にお付き合いし、その真剣な姿勢に驚いたこともあった。

英先生の特徴は、何といってもその雄弁にあった。特に学生相手の授業・座談ではその特徴をいかに発揮され「カレライスにソースをかけて食っちゃいかんよ」に始まり、人生訓、若き日の想い出、テールマナー等々について、学生を指導された。現在ふと、英先生そっくりの口調で学生に注意している自分がつきがく然とすることがある。

先生が亡くなられてしばらくしてから、ご遺族から慶應義塾法学部へ寄付がよせられた。先生を偲ぶいい企画はないか

と考えた末、法学部が今年から設置する総合講座にご意思を生かすことにした。戦後五〇年、激動する世界情勢の中で、日本はいくつかの外交上の選択を行ってきたが、そうした日本外交の選択について、そのテーマを専門に研究し学会の第一線で活躍する研究者を招き、私の司会により講義と質疑応答を行うことにしたのである。講座のタイトルは「戦後世界と日本」、予定しているテーマと講師は次のようである。

「戦後外交と終戦構想」(波多野澄雄筑波大学助教授)、「占領と追放」(増田弘東洋英和女学院大学教授)、「新中国と日本——日中貿易の再開」(波多野勝常警大学教授)、「日ソ国交回復」(田中孝彦一橋大学助教授)、「日米安保改定」(坂元一哉大阪大学助教授)、「日韓国交正常化」(李鍾元東北大学助教授)、「沖繩返還」(河野康子法政大学教授)、「日中国交回復」(別枝行夫成蹊大学講師)、「石油ショックと日本外交」(木村昌人東洋英和女学院大学助教授)、「日米経済摩擦」(草野厚慶應義塾大学総合政策学部教授)、「日本と東南アジア」(添谷芳秀慶應義塾大学法学部教授)、「日本と国連」(田所昌幸姫路獨協大学助教授)、「日本とヨーロッパ」(小久保康之静岡県立大学講師)。

戦後の外交について、英先生は専門とはされておられなか

ったが、おそらく「わしの意思が生きたね」とあの世で喜んで下さると思う。

改めてご冥福をお祈りしたい。

法学部教授

池井 優